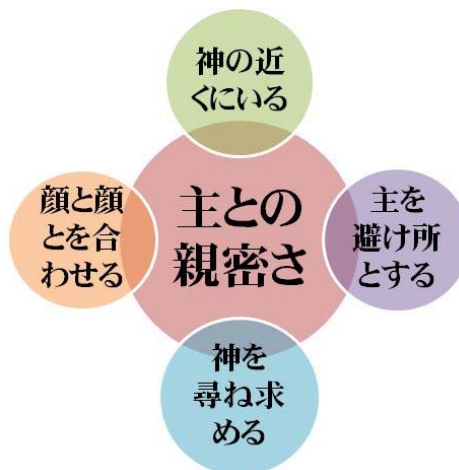


ベレーシート

● 「主との親密さ」について、以下のように、四つの視座からこのテーマを味わうことができます。四つの視座とは、第一に「顔と顔とを合わせること」であり、第二は「神の近くにいること」、第三は「主を避け所とすること」、そして第四は「神を尋ね求めること」です。これらはどの一つをとってみても、それだけで十分すぎるほどの内容を持っています。今回、ウヒョン監督によって取り上げられたこれら四つの視座は卓見です。

● 「主との親密さ」というテーマは、幼子ではなく大人のための堅い食物、つまり「義についての教え」そのものであり、それについて学び、体験することは決して容易なことではありませんが、いのちにかかわるきわめて重要な教えなのです。ところが、今日の教会においてこのことがないがしろにされているのです。以下の四つの視座はそれぞれ密接なつながりをもちながら、一つのことを表わしているのです。



## 1. 「顔と顔とを合わせて」見るということ

● 「顔と顔とを合わせて」というフレーズ(「パーニーム、エル・パーニーム」 פָּנִים אֶל-פָּנִים)は、以下のように、聖書の中に5回出てきます。旧約に4回、新約に1回です。

①【ヤコブ】

「そこでヤコブは、その所をベヌエルと呼んだ。「私は顔と顔とを合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」という意味である。」(創世記 32 章 30 節)

②【モーセ】

「主は、人が自分の友と語るように、顔と顔とを合わせてモーセに語られた。」(出エジプト 33 章 11 節)

③【イスラエルの民】

「私たちの神、主は、ホレブで私たちと契約を結ばれた。・ ・主はあの山で火の中からあなたがたに顔と顔とを合わせて語られた。」(申命記 5 章 2,4 節)

④【モーセ】

「モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を主は、顔と顔を合わせて 選び出された。それは主が彼をエジプトの地に遣わし、・・・に対して、あらゆるしるしと不思議を行わせるためであり、また、モーセが、イスラエルのすべての人々の目の前で、力強い権威と、恐るべき威力とをことごとくふるうためであった。」(申命記 34 章 10～12 節)

⑤【キリスト者】 I コリント 13 章 10 節～12 節

10 完全なものが現れたら、不完全なものはすたれます。

11 私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。

12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見るようになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。

●特に、I コリント 13 章において、子どもであるときには不完全な、一部分を、しかも鏡にぼんやりと映るものとしてしか見ていませんが、大人になるならば完全なものを知るようになることが述べられています。それゆえ、子どもから大人にならなければならないことが勧められているのです。

●このことはヘブル人への手紙 5 章にも語られています。

【新改訳改訂第 3 版】ヘブル 5:12～14

12 あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。

13 まだ乳ばかり飲んでいような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。

14 しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。

●乳ばかり飲んでいような幼子から、堅い食物を食べることのできる大人として成熟し、義の教えに通じる必要があると語られています。「堅い食物を食べ」、「義の教えに通じる」とはどのようなことなのでしょう。それは、より成熟した、高いレヴェルへと進み、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練されることを意味しています。「良い物」とは「聖なるもの」(マタイ 7:6)のことであり、「悪い物」とは「世を愛すること」(I ヨハネ 2:15～16)です。何を求めるべきか、何を捨てるべきか、それを見分ける霊的な感覚を訓練する必要があるのです。そうでなければ、主との親密なかかわりを持つことはできないからです。

●さて、出エジプト記 33 章にあるように、「主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られました」が、そのモーセが主に対して語っていることばに注目したいと思います。

「今、もしも、私があなたのお心にかなっているのだとしたら、どうか、あなたの道を教えてください。そうすれば、私はあなたを知ることができ、あなたのお心にかなうようになれるでしょう。」(33:13)

●「あなたの道」とは「主の道」です。その道を教えられるならば、主を知ることができ、主の心にかなうようになれるとあります。「主の心にかなう」とは原文直訳では「わたしは主の目の中に恵みを見つける」となります。つまり、「恵み(「ヘーン」 חֵן)を見つける」とは、「主を知る」ことを意味します。言い方を変えるならば、「主の道とは、主を知ることであり、そのことが恵みなのだ」ということです。このことはきわめて重要です。「今日のメッセージは恵まれた」というような単なる心の感動を意味する「恵み」ではなく、主を知ることこそが恵みなのであり、主の目にかなうことなのであり、それが「主の道」なのです。

●そのためには、主であるイエシュアにとどまり、イエシュアの歩みをよく学ばなければならないのです。主の道を「学ぶ」ことによって、はじめて、「ソード」(רֶיֶס)の世界(神の奥義、神の秘密の会議、神の戦略、神のはかりごと)へと入って行くことができるからです。これが「顔と顔を合わせる」という概念であり、花婿と花嫁との愛のかかわりです。ダビデも、そしてパウロも、このかかわりを生涯にわたって求め続けました。今日の教会は、こうした「花嫁としての霊性」が求められているのです。

## 2. 神の近くにいること

●詩篇 73 篇はイスラエルの霊的指導者であるアサフが記したものです。神を信じていなくても、深刻な問題で頭をかかえ込んだりすることもなく、結構、豊かな生活をし、羽振りのいい生活をしている。ほしいものが何でも手に入っている。一見、神を信じている自分たちよりも彼らのほうが幸せそうに見える。まじめに神を信じて、神に従おうとしている自分がばからしく感じる・・・そんな思いを抱いたことが彼の心をかき乱しました。もしその心をそのまま述べたとしたら、彼は自分の仲間を裏切り、つまずかせることになると考えていたのです(15 節)。

●彼が正直に自分の内に起こっている深刻な問題を告白してくれなければ、だれも気づくことはなかったでしょう。不条理に対する嫉み、ひがみは、クリスチャンがこの世の中のノンクリスチャンの姿を見たときだけでなく、クリスチャン同士を見てもやはり同じことが起こります。「嫉み」、それはしばしば私たちが他の人とくらべることによってもたらされます。自分に与えられているものよりも、ないものに目が奪われてしまうのです。私たちが何をもって幸せと感じているのかが問われます。信仰者といえども、その幸福観がこの世のそれとそれほど変わらないならば、アサフが経験したような苦しみを味わうかもしれません。嫉みは信仰の歩みを狂わせます。信仰生活を形骸化させます。神に感謝する力も祈る力も奪われます。それはまるで牢獄の中にいるような状態です。不条理と思える現実をどう解釈したらいいのか、どう理解し受け止めたらいいのか、考えれば考えるほどアサフにとっては苦しみを増し加えるものでした(16 節)。

●そんなアサフに転機をもたらしたのは、17 節の「私は、神の聖所に入り・・・」です。アサフは聖所でいつものように神を礼拝し、瞑想していたとき、上からの悟りを与えられたのです。アサフは上からの悟りを与えられて、はじめて自分がいかに愚かで無知であったかを思い知らされました。そしてアサフの結論は、「私にとっては、**神の近くにいることが、しあわせ**なのです」(28 節)という確信でした。ちなみに、「近くにいること」「近づくこと」はヘブル語で「キルヴァー」(קָרַב)であり、祭司的用語です。今日、この「祭

司としての霊性」の回復が求められているのです。

●この確信へと至った転換点は、17 節の「私は、神の聖所に入り」という部分です。これは単に建物としての「聖所に入る」という意味ではなく、「神の臨在の場としての、あるいは、神の秘密にふれる場としての聖所に入る」ことであり、そこでは「神に向かって、顔と顔を合わせるほどに親しい交わりを持つ」ことを意味します。そこに入るまでの作者は、思いも心も深い苦悩の中にいました。しかしそれは「神の聖所に入る」までです。作者は聖所において瞑想し、1 節の「神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い」という命題を、再度、気づかせられたということです。

●今日に生きる私たちキリスト者も、自ら、「聖所に入ること」が求められます。そこではおそらく神に対する考え方が正されるに違いありません。神は、「わたしの思いは、あなたがたの思いとは異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。」(イザヤ 55:8) と語っています。「聖所に入る」までは、神の思いと神の道を悟ることができず、依然として苦悩の中に据え置かれるかもしれません。それゆえ、「私の目を開いてください。私が、あなたのみおしえのうちにある奇しいことに目を留めるようにしてください。」(詩 119:18)、と絶えず祈り続けなければなりません。なぜなら、求め続ける者は与えられ、捜し続ける者は見出し、たたき続ける者には開かれて、良いもの(「トーヴ」 טוב)が与えられると主が約束しておられるからです。

### 3. 主を避け所とすること

●詩篇 73 篇 28 節の前半と後半には、主との親密さにおける重要なキーワードがあります。前半はすでに述べたように、「神の近くにいること」ですが、後半では「**神なる主を私の避け所とする**」ことが記されています。つまり、主との親密さに入るためには、誰にも邪魔されない奥まった場所、隠された場所、すなわち、「シークレット・プレイス」(secret place)が必要なのです。イエシュアもしばしば人里離れて、御父との祈りのときを過ごしておられました。

●「避け所」(あるいは、隠れ場、避難所)はヘブル語で「マフセー」(מַחְסֵי)です。詩篇 46 篇 1 節には、「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」とあります。まさに、「避け所」は防衛の保障を意味します。とすれば、私たちがすべきことは 10 節にあるように「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」ということなのです。その方法でしか、主の名があがめられることはないからです。

●今日多くの教会ではある種の行き詰まり感に対処しようとして、さまざまな方法を試みたり、プログラムを立案し、協力したりして、熱心に主の働きをしようとしています。ところが、主が言われるのはそれとは反対に、「やめよ」なのです。「あなたがたの働きをやめて、わたしこそ神であることを知れ」と命じています。そのことを明確に悟って、「隠れ場」に隠れる必要があります。それは主にとどまるためです。それは本当の神の働きをするためなのです。そのモデルはイエシュアです。イエシュアの働きはプログラムを立てて、それをこなすような働きとは全く無縁です。御父の心を知ることによって、御父から来る油注ぎによつ

て御父の心を悟り、御父のみこころを成し遂げることに集中されました。

●「主を避け所とする」とは、詩篇 91 篇 1 節では「いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る」と表現しています。そこには主に対する完全な信頼があります。「避け所である主を、いと高き方を、自分の住まいとする者」に対する祝福が、14~16 節で「彼は、わたしを愛しているから、助け出そう。知っているから高くあげよう。呼び求めているから、答えよう。」という形で約束されています。

## 4. 主を尋ね求めること

●「主との親密さ」の、さらなる視座は、主を尋ね求める者に約束されるものです。詩篇 14 篇 2 節にはこう記されています。「主は天から人の子らを見おろして、**神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうか**をご覧になった。」と。ここで「尋ね求める」という動詞は「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)です。エレミヤを通して語られた将来と希望を与える平安の計画の目的は、神の民が心を尽くして主を捜し求めるなら、主を見つけるようになるというものでした(エレミヤ 29:10~14)。原文では「慕い求める、捜し求める」という意味の「バーカシュ」(בָּקַשׁ)と、「尋ね求める」という意味の「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)という二つの動詞が使われているにもかかわらず、正確に訳されてはいませんが、この二つの動詞こそ主が最も喜ばれることなのです。なぜなら、神を「慕い、捜し求める」者、神を「尋ね求める」者によって、はじめて神は見つけられる方だからです。

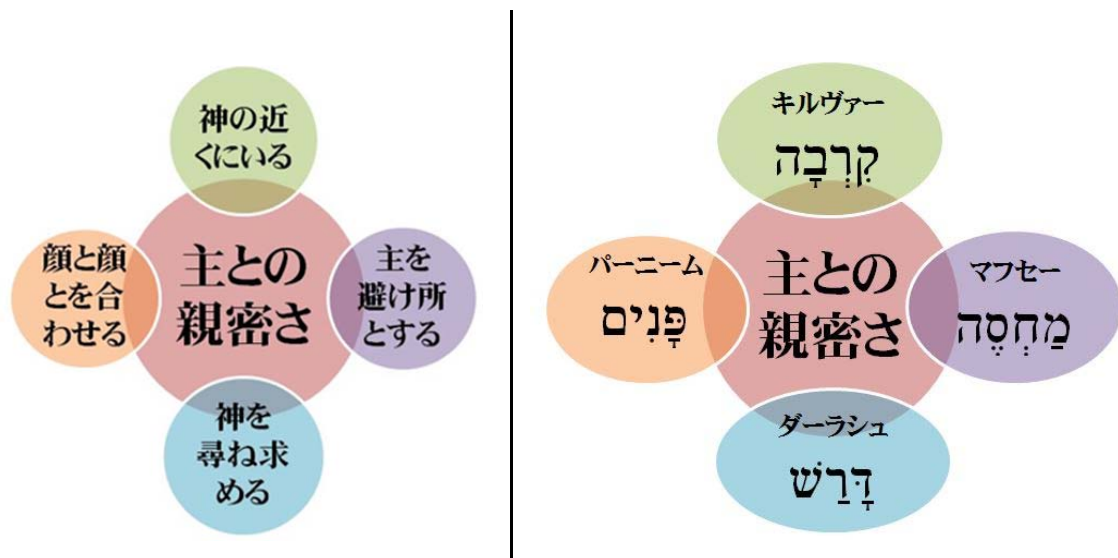
●主を尋ね求めた旧約のモデルは何と言ってもダビデです。そのダビデの霊性を確認しておきましょう。詩篇 27 篇 4 節がダビデの霊性を良く表わしています。「**私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。**」・・・ここで、前者の「願った」と訳されたヘブル動詞は「シャーアル」(שָׁאַל)が使われ、後者の「求めている」は「バーカシュ」(בָּקַשׁ)が使われています。いずれも主を「尋ね求める」という意味です。ちなみに、ダビデの前のイスラエルの王であったサウルが霊媒師に伺いを立てるという場合は「シャーアル」(שָׁאַל)と「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)でした。「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)も「バーカシュ」(בָּקַשׁ)も、熱心に神を「尋ね求める」という意味では同義です。「ダーラシュ」は理性的な意味合いが強いのに対して、「バーカシュ」は相手との心情的な意味合いが強いという特徴がありますが、いずれのことばにも共通しているのは「シン」(שׁ)という神を表わす文字があることです。

●「サウル」はヘブル語で「シャーウル」(שָׁאוּל)と表記しますが、その名前には「神を尋ね求める」「神に伺う」という意味があります。ヘブル文字の שָׁאַל の最初の文字である「シン」(שׁ)は、本来「歯」(英語の tooth)を意味します。そこから「食い尽くす、むさぼり食う」という意味が派生します。次の「アーレフ」(א)は力あるものを意味し、「ラーメド」(ל)は杖をもって教えたり、指導したり、導く者を意味します。「アーレフ」と「ラーメド」で、ヘブル語の「エール」(אֵל)となり「神」を表わします。つまり三つの文字が結びつくことで、שָׁאַל は、神を尋ねる、神に伺う、神の知恵を得る、神に熱中するという意味に発展します。

●ところが、サウルは自分の名前に秘められているメッセージを自らの生涯において空虚なものにしてしま

いました。「サウル」は自分の名前のように生きようとはしませんでした。というのは、神の代理者として立てられたサウルが「霊媒によって伺いを立て」(I 歴代誌 10:13)だからです。サウルの場合、尋ね求める対象が神ではなく、死人の霊であったことが神の怒りを買ったのです。皮肉にも、「死人の行く国」である「よみ」が「シェオール」(שְׁאוֹל)であるのは、警告的な意味合いが含まれていると思われます。

●新約で登場する使徒パウロは、最後の使徒としてキリストに捕えられた人物です。パウロはギリシア名ですが、そのヘブル名は「サウル」と表記されています。それはヘブル語の「シャーウル」(שְׂאוּל)と同じです。まさに、イスラエルの最初の王サウルと同名であり、しかも同じベニヤミン族の出身です。旧約のサウル王の失敗を、使徒パウロが踏み直しているのです。私たちはこのパウロを通して多くの霊的な奥義を与えられています。パウロほど主のために働いた者はいませんが、彼ほど主を尋ね求めた者も他にはいないのです。それゆえパウロの語っている多くの事柄は神の奥義です。それゆえ、彼は神の隠された秘密を私たちに明らかにしてくれた人物と言えます。まさにその意味において、使徒パウロはイスラエルの初代の王「サウル」の汚名を返上させた人物なのです。



●このレポートは、2014.5.16(金)にキム・ウヒョン監督を招いて、北海道「荒野の学校」2014で語られた内容のポイントとキーワードを整理し、さらに内容を付加し、ある部分は割愛して編集したものです。あくまでも、自分のためのものとしてまとめたものです。録音されたものを実際にお聴きになりたい方は、通訳者の金聖圭師がWeb上にアップロードしていますので、そちらからお聞きください。

[http://www.lovehokkaido.net/midbar.awe.jp/huang\\_yeno\\_xue\\_xiao/Podcast/akaibu.html](http://www.lovehokkaido.net/midbar.awe.jp/huang_yeno_xue_xiao/Podcast/akaibu.html)

●キム・ウヒョン監督の語るメッセージの特徴は、イエシュアと同様に、常に、幕屋の至聖所から語るうとしていることです。まさに、大人のための堅い食物ですが、深みがあり、啓発的です。

2014.5.24 銘形 秀則